「アーティストと地域をつなぐ　～瀬戸内国際芸術祭を事例に～」

北川　フラム氏（アートディレクター）

2019 年 2 月 17 日（日）　びわ湖大津プリンスホテル

こんにちは。北川フラムです。数年前に、高島でアーティストの皆さんの工房を見せていただいて、泊まった明け方に鹿がいっぱい立っていたのを覚えています。それ以来です。今日は、瀬戸内の海からこの滋賀の「うみ（湖）」まで来たという感じです。呼んでいただいてありがとうございました。

身の回りの話で恐縮ですが、朝、高松で打ち合わせをして、午後から香川大学の 70 周年記念でお話をしてきました。香川大学は工学部の中に美術的なものを入れようと創造工学部というものをつくり、今後アジアのいろいろなところとつながりながら、大学として瀬戸内国際芸術祭に関わろうと気合を入れています。また豊島という昔、産業廃棄物の問題で島が割れていたところですが、そこで今年の芸術祭をどういうふうにやろうか、島の皆さんの意見や質問を夜まで伺っていました。豊島ではいろいろな話があるのですが、一つは、ものすごくたくさんの人たちが来られて、事故が多くなった。レンタサイクルは電動ですから、みんな気分良く広い道に行きたがります。もともと住んでいる人たちは小さな農道からパッと周りを気にしないで出ていきます。これまでも相当気を付けていますが、もう一度、住民の目線でいろいろなことを考えよう。今まで頑張って前へ前へと半年ぐらいやってきたことを、もう一度ゼロから見直そうという話をしてきました。もう一つ大きな問題があって、なかなかいい場所がない。音の問題など周辺住民の理解がなかなか得られない。また、狭い島の中ではアーティストたちがバッティングして調整するのは結構大変です。空き家は多いのだけれども、空き家の持ち主の説得だけでは駄目で、周りの人たちも理解してくださらなければいけない。田舎にいる三女は早く手放して、誰か来てくれればいいと思うのだけれども、東京とかにいる長女、次女は、ふるさとの家がないと気分が悪い。まだ土地信仰が多い。最後は、お金と土地の問題がかなり効いてきます。非常に生々しい話ですが、今日は文化・経済フォーラムでありますから、そういう生のお話を少しさせていただきます。

（瀬戸内国際芸術祭で）やろうとしていることは、アート建築と美術・文化的なものを正しくやる。簡単に言えば、作品をつくる。それが一つの目玉ではありますが、美術の展覧会をやる気は全くありません。狙っているのは、そこにアートがあることによって見えてくる、その地域の生活です。瀬戸内の島は完全に見捨てられました。明治になったくらいまでは大阪の前庭として非常に元気でした。江戸時代、大阪は「浪華の八百八橋」と言われるまで、川の中にあるまちだったのです。それが、川に背を向けて川は汚水だけになってしまいました。日本全体にも言えることですが、水の大切さを忘れ、水、川、海にものを捨てていくようになって、大阪がそこから一気に陥落していきました。1910 年代、1920 年代は大大阪と言われて東洋一の、東京をはるかにしのぐ元気があったのですが、それが壊滅しました。瀬戸内は北前船の時代を含めて、大変自由な島、あるいは自在な海でつながってきましたが、私たちは何かとんでもない価値観の中で動き出しまして、捨てられてきました。そういったものをずっと見ていこうとしています。

日本の国土は、海岸線の長さが世界で第 6 位です。すさまじい形で海と付き合ってきました。極東の島国でしかない日本です。しかも、太平洋からこちらに移動したという例はないわけです。つまり、どん詰まりの極東の島国でありながら、大陸、あるいは半島、ときには北の方から、あるいはインドネシア、台湾を通して沖縄から上がってきた人たちが非常に多いです。いろいろな意味の文化を吸収しながら、倉庫に入れてときどき出して食べる漬物みたいなもので、発酵文化

と言っています。そういう中で、人類史の幅をすごく広げてきたところがあります。これは、周りは海という意味で言うと、日本列島の中の滋賀の持っていた意識と似ているかもしれません。ここは交通の要所でもあるし、滋賀もうみ（湖）があって、いろいろな意味でここに大きな可能性がある。そこに発酵文化も文字どおり、鮒ずしを手作りし、そういうふうに少し似ているところがある。

極東の島国でありながら、その中でどれだけ頑張ってきたかにも関わらず、今、とんでもないことになっている感じです。そういうものを、もう一度、考え直さなければいけないということがあります。海の復権というのは、面倒な言葉です。一言で言えば、この芸術祭の目的は、おじいちゃん、おばあちゃんたちの笑顔を見ようということに尽きます。はっきり言って、美術の仕事では全くありません。おじいちゃん、おばあちゃんが「生まれてきて良かった」と「大変だけれども、それでもいいことあったね」とか「ここで過ごしてきて良かったな」と思えるようにしたいことに尽きます。それをやるには、とにかくいろいろな人たちが関わる。前回、瀬戸芸（瀬戸内国際芸術祭）は 7,000 人です。おそらく今年は、１万数千人の人たちが手伝うでしょう。その約半分は海外のサポーターが 5,000 人ぐらいだろうと言われています。つまり、いろいろな意味で、人々がつながっていかないと駄目だということです。そして、世界の英知が集う。香川のために、あるいは瀬戸内のために何か頑張ろうと言ったって、そこでやっていることが自分の土地に持っていってやれるのか。あるいは、そこでのいろいろな体験が楽しいと感じるか。そういうことがなければいろいろな人とはつながっていきません。そこで、今年の 8 月にあるアジアフォーラムは、おそらく数十か国の人たちが来られて意見を交換するだろうと思っています。実際にアジアのいろいろな国で芸術祭が増えています。台湾は、いろいろな県と市が、大地の芸術祭という旗を立ててやっています。芸術祭は大地と関わるものだと思っていて、越後妻有の大地の芸術祭（大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ）は固有名詞でもなんでもなくなっています。中国もいろいろな問題があります。農村問題、田舎の問題をどうするか。中国の格差社会の中で、田舎こそ重要だということで、多くの人たちは大地の芸術祭を目標にしながらここに来ています。そんな中で、当然のことながら、次代を担う若者や子どもたちにどうバトンタッチしていくか、ということを考えながらやっています。

一番重要なことを申し上げますと、芸術祭は 3 年に 1 回、3 年間で約 1,100 日あるうちで、越後妻有（大地の芸術祭）は 50 日、瀬戸内（瀬戸内国際芸術祭）は 100 日（の開催期間）です。3 年に 1 回のお祭りを目標にいろいろな人たちがやりますが、重要なのは残りの 1,000 日をどういうふうにやるかということです。いろいろな人たちが残り 1,000 日をどういうふうに活動していくか、それが担保になってお祭りになっています。

（瀬戸内国際）芸術祭は 2010 年に第 1 回が始まりましたが、2005 年から 2010 年までの人口の減り方はこうですが、とんでもないことが起き始めました。豊島は、2010 年に約 150 人いたのが、今は 200 人になりました。50 人が順番待ちです。つまり、いろいろな意味でのインフラができたということです。そこの小中学校が、日本で初めて、いったんなくなって復活したことがあります。小豆島は、人口が増え出しました。

どういうことがここであったのか、簡単に申し上げます。これは瀬戸内の海ですけれども、こんな海はどこにもある。場所によっては「それは、琵琶湖だ」と言う人もいるかもしれない。そんなものです。せいぜい夏だというのが分かるぐらいです。しかし、ここに「南瓜」（草間彌生の作品）が一つ出てくると、これは瀬戸内の海だとか、直島だと分かる。つまり私たちは、今、アートによって、その場所に言葉を与える。あるいは、光と影を与えることによって、私たちの記憶の中にある土地の生活とか歴史をよみがえらせてくれる。そういう働きを美術が持っていまし

た。思い起こしてください。今から500年くらい前ですが、林羅山の息子の春勝という人が『日本三奇景』というのを書きました。これは、素晴らしいという意味です。その『日本三奇景』は、ご存じの天橋立、厳島神社、松島です。これを頭の中に思い出していただきたい。全部、海、あるいは湖も海と言っていいと思いますが、全部、緑が非常に濃い場所にあります。そして必ず神社仏閣があります。これが、私たちが考える風景の美しい満点な形です。青い空、海がある。つまり、空気がきれいだということです。緑が濃い。そして、そこに知識・教養がある。その代わりが美術になっています。こういうふうな形になっていて、これが私たちの美意識みたいになっている。

ここで、ちょっとずれた話をしますが、今から80数年前に国立公園ができて、その第1号の一つが瀬戸内海です。調べてみたのですが、気持ちが悪いぐらい、今の政府主導の観光と全く同じことを彼らは言っています。第一次世界大戦があって、大変だ、外貨が欲しいということで、そのためにインバウンドという言葉まで出てきます。今は、大地の芸術祭、あるいは瀬戸芸が日本にとっての大看板です。つまり、わずかに政権がうまくいっているのはインバウンドと、もしかしたら地方が少しずつ元気になり出したからです。今の戦略はだいたいのことが20年前に起きていることを、誰かすごく頭のいい方がおられて、引っ張り出しています。国民文化祭は元気がない。おそらく、来年から全部が「日本博」という形で出てくるだろう。これが一律、悪いわけではありません。ただ要注意は、国が「文化」と言ったときには全部が危ないということです。つまり芸術に関して簡単に話をすると、26人いるとして、AからZまでの人がいる。私たちはAからZまでを足して26で割って、NとかM、これが私たちだと言われます。これは、要するにアベレージとか、あるいはマーケティングということです。足して、数で割って、この辺だという。これは一つの指標になりますが、美術の面白いことは、AからZまでを足して割るわけにいかないのが美術です。美術というのは、一言でいえば一人ひとりが違う生理を持っていること、これをバックボーンにしているのが美術なのです。そういうことは、きちんと押さえておきたい。ですから、そういう中で、今、美術はものすごく便利になりだしている。自然とつながっている人間の生理こそが、私たちの重要なもとなのだということを美術という形を借りて、あるいは美術が代表して、ものすごく大きな原理になり始めているということだと思います。ちょっと面倒な話になって恐縮ですが、美術は、彫刻とか絵画と言われるジャンルではなくて、全然違うものだということを僕はがんがん申し上げておきたい。政府ですら、一昨年、文化芸術基本法というものを180度変えました。日本の法律の中で一番保守的でのろい芸術文化が、抜本的に180度変わったのです。彫刻とか絵画などがものすごく大切なのです。けれども、日本の今の文化芸術を芸術祭が引っ張っているという言い方を追加します。これが、すごく重要だということです。つまり、芸術祭は何をやっているかというと、お祭りと共に地域の生活をもう一度、明らかにしよう。これがグローバル化して、世界が均一の国になることに対して、日本の地域文化が動き出した、反逆という当たり前のことだと思います。そして、特に重要なのは「食」だということを言いました。僕らから考えると当たり前です。だけど、今まで食というのは文化の「ぶ」の字にも挙げられなかった。だけど、ものすごく重要なのは食であることを文化芸術基本法では言い出しました。これほど世の中の現実的なところが変わっていることを、政府すら追認せざるを得なくなったということです。

これに対して的確に動いているのは、例えば、IT企業の新しいところは、ほとんどそういう動きになっています。あるいは、何とか計画とか、あるいは何とかという本屋さんとか、何とかリゾートというホテルとか、世界中で来てくれと言われるところは、全部、文化というものを自分たちの会社の体質に変えなければいけないと思いだして、動いています。そういうところは、国

外でも歓迎されています。例えば 30 歳の人が絵を描いたら 1 億円で売れた、こんなものは全然表層です。そうではなくて、もっと動いているのは、食文化とか、地域文化とか、そういうことをやっている。それが、今、大切になっていることを申し上げたい。

瀬戸芸のアンケートを見ますと、海を渡って島に行くのに興味があるということと、現代アートのすごい展示が行われている。これが来る人たちの動機です。越後妻有の場合もそれは同じで、もう一つは里山に行きたいということです。だけど、帰るときのアンケートは、この二つは残っていますが、まるで違うものになっている。来るまでは全然思いもしなかった感想が、がんがん出てきています。第 1 位は、地元の人と話したことがうれしい。2 番目が、地元の食を食べられたのがすごくうれしい。3 番目は、少し落ちますが、お祭りに参加できたことがうれしいです。今、底流で動いているのは、五感、あるいは大地とつながっている生活に対する、ひそやかだけれども強力な動きです。それが最先端の企業を押し上げてくることだと申し上げておきたい。このようなことが越後妻有、あるいは瀬戸内で起きていることです。

今までアートは、作品がどこでも同じように見えることが目標でした。だから、高い白い壁の中でやれば、ヨハネスブルクでも、ニューヨークでも、大津でも同じように見えます。これが 20 世紀の目標だったわけです。今は、そういうことでなくなった。この作品はどこで見ても同じように見えるのは、それはそれでいいことですが、それは実験室で何かの研究をしているときです。それなりの意味があります。例えばがんに効くかどうかお医者さんが研究する。アーティストたちも、何かこの世の中で自分たちが役に立ちたいということを切実に思っています。そういう人たちが芸術祭に出てきて、その地域の課題、地域の人たちを元気にする。年をとって、私たちは見捨てられているという山の中、あるいは島の人たちに、自分たちが絵を描くとか彫刻をやることで役に立ちたいと思って、みんな動いてきています。そういったことが今、起きてきているということです。アーティストたちは実験室だけではなく、まちに出始めたのです。はじめ現代美術というのは都市でなければ駄目だと思っていたけれども、そんなことは何もなかった。山の中、あるいは離島で、ものすごく大きな意味を持ち出しました。

この豊島美術館がものすごく面白い。今、世界の十指に入るぐらい大人気です。とにかく順番待ち、数時間しないと入れないので、時間で入場者の予約を取るようになりました。ここにあるのは、何もないということです。わずかに水滴が出てきているだけです。檀山が涵養している地下水が出てきている。傾斜がありますから、すっと流れて、少しずつたまって、人の前に水たまりがあります。そのぐらいです。彫刻とか絵画がないのに美術館と言っておかしいなんて誰も言わない。皆さんにこのことをぜひお伝えしておきたい。この美術館は西沢立衛さんという建築家の作品です。安藤忠雄さんの作品（地中美術館）がありますが、安藤さんが直島で約 30 年間やってきて、地元の工務店を鍛えてきた、このコンクリート職人たちの技術がなければこれはできなかった。つまり、微妙な撥水性がなければ、地下水が垂れてべちゃべちゃですよね。ものすごく見事なアンギュレーションをつくれなければ、水がすーっと動かないということを含めて。僕が申し上げたいのは、滋賀はものすごくいろんな意味での技術が高いところです。僕は、越後妻有でも瀬戸内でもそうなってほしいと思います。今、公共工事が駄目だと言っているけれども、そんなことはどうでもいい。とにかく、それぞれのところで産業が本当にまとまらなければいけない。例えば、高松で言うと、水族館のアクリルパネル技術。企業名は言わない方がいいですね。すぐに分かります。あるいは、段ボールは日本一です。つまり、そういったことを工務店と組んで、世界のどこでもが欲しがる技術を磨いてくれと僕は言っています。そうしたら、生きていけ

る。ものすごく高い技術を持って、世界のいろいろなところを手伝ってほしいと僕は思います。

瀬戸内の島とか、有名なところであるわけではありません。見捨てられていたと思われている島です。自慢話で恐縮ですが、今年、瀬戸内が『ナショナル・ジオグラフィック』で世界の 1 位になりました。日本で唯一です。ニューヨーク・タイムズでも、今年世界で 7 番目に行くべき所になりました。なぜかというと、地域の生活している中に根差そうとしているからです。今、大きな流れは、いろいろな生活があることを知りたいということです。それに参加したいということです。政府は、訪日外国人旅行者数を 2020 年に 2,000 万人から 4,000 万人に目標を見直しました。それは何で成功しているかというと、いわゆる名所旧跡だけではない。大量の消費だけではありません。日本の地域、地域で行われている、地元に根差した文化、そこに根差している産業というか、工夫に対する興味がベースとして圧倒的にあることです。地域の作家が出ればいいとはあまり思わない。だけども、この地域のいろいろな伝統芸術とアートをかなり自主的にお見せします。あとは、各地とつながる。これは、かなり意識的にやっています。つまり、よその国があって、いろいろなところに違う生活をした、違う価値観がある人、一人ひとり、どこの国でもいい、知っていると知っていないのでは大違いです。自分の友だちがいればそこの国と戦争したくないでしょう。食は、先ほど申し上げたように、その地域が一番分かるものです。地域の食は、それぐらい強い。瀬戸内は、残念ながら、一番うまく捕れた鯛は京橋とか日本橋に持っていく。僕は、それはやめろと言っている。一番うまいのは、ここへ来て食べてもらえということに、まだ自信を持てないのですが、今、そういうことをやろうとしています。（私は）14 軒のレストランのおやじでもあるわけで、これは大変です。

滋賀というのは、伝統もあるし、琵琶湖を抱えているという気持ちの良さもある。いろいろなことを含めて、本当にさわやかに、敬意を表して申し上げているのですが、そういう中で、伝統文化のかなりいい部分がここに残っています。あるいは、美術的な部分もかなり持っているところです。もっといろいろな形でよそとつながっていってもらいたいと思います。それが今後、すごく重要な感じになってくるのではないかと思います。